

の火鉢の引出しを明けて見、銭が這入つて無いか」「ア、五十銭あつた」「そんなら其れを此方へ藉し、おい頑鐵三十銭渡すで、残りの二十銭は二人で別けとこ」とこの按摩も呑氣な男で、これから頑鐵を椽側の敷居を枕に寝させて、その次に八やん、それから米やんが、繼ぎ目に蒲團着せて、ランプの火を消して待つて居る、そんなことは知らずに、熊五郎と彌太はんと萬やん三人が、馬の糞を拾ふて歸つて來ました「彌太はん、こん度は私が先に這入る、モウ大丈夫や、私の頭をばドツキやがつて、こんな大きな瘤が出來た、口へ馬の糞を捻じ込んでやるのや、ア、また火が消へてある、上り口に誰や、寝て居るで」「酒に酔ふてランプでも引つくり返しよつたのや無いか、構へんよつてに、口の中へ馬の糞を捻じ込んでやれ」「ヨシ頭はどこや……、オヤ、途方も無い脊の高い奴やなア、頭が椽側まである、頭が坊主で、コリヤ、高入道や……」「コラ そんな馬鹿な事があるもんか、ハ、ンまた何ぞ造らへよつたのやな」「コレ彌太公火を點して見い」マツチを出して火を點し始めたから、上り口に寝て居た二人は、化物のネタが知れるから、そつと逃げ出しましたが、頑鐵は敷居を枕にして、グウ／＼寝て仕舞うた「サア火が點つたよつてに、充分見てみい」「ア、親方、化物は二人やと思ふて居たら、按摩の頑鐵も、交つて居るのやな…… グウ／＼寝てよる、コラ頑鐵、ヤイ頑鐵」「ア、かもうか……」「そら何を仕やがるのや」「コレハ、親方と彌太はんだすか」「彌太はんやない、何うさらしたのや、これは」「ヘイ 今なア、表まで私が流して來ましたら、お友達のハツ

さんと米はんが居はりましたで、化物を造らへるのやよつてに、お前三十分程、こゝで寝て、くれ三十銭遣ると、云ひはりましたので、私し三十銭で雇われましたのだす」「ア、三十銭出して、こんな奴を雇うてよるね、併し、彼奴等ふたり、よう三十銭持つてよつたなア「何や知りまへんが、火鉢の引出しに五十銭あつたので、私に三十銭呉れはりました、残りは二人で分けてはりましたで」「ア、無茶しよるナ、頑鐵われも馬鹿やなア、よう物を考へてみい、火を點けたよつてに好いけども、闇がりて高入道と間違ふて割木で、われの頭でも毆られて見い、死んで仕舞はんならん、生命がけの仕事をば、僅か三十銭ぐらいで雇はれるとは、きさまは餘つ程腰のない奴やなア」「チヨット待つとくなはれ、ア、腰は先刻に抜けたやうでござります。

話中に出る方言の注解

家守(差配人)家主の代理で貸家の差配をする
走り元(流し元)
おいゑ(壘の上)
ヤヤコシイ(疑らはしい)
あんじよう(具合よく)
建しな(建てる際)
シヨムナイ(つまらない)仕様も無いの轉化
庭(土間、叩き)普通の庭を關西ではせんざいと云ふ
デボチン(顔ひ)
腰が無い(性根がない)

此噺の主なる口演者

故 桂 枝雀 (入江清吉)
故 桂 萬光 (伊豆徳松)
四代目 笑福亭松鶴 (森村米吉)
故 笑福亭松光 (梶木市松)
故 林家正樂 (織田治太郎)